

## タイ北部におけるシャンの文字文化と仏教実践

村上忠良(大阪大学 世界言語研究センター)

ミャンマー連邦を中心として東南アジア大陸部の内陸山地に広く居住するタイ系民族のシャンは、タイ国では主として北部に居住している。タイ国内のシャンは、タイ国のマジョリティーとの言語的・宗教的な親和性(タイ系言語、上座仏教)をもつことから、タイ国に比較的「同化」された少数民族、あるいは「タイ国民」化した少数民族とされる。現在タイ国内で生まれたシャンの多くは、タイ国籍を有し、タイ国の学校教育を受け、タイ国民としての意識を強く有している。確かにシャンが多数を占めるタイ北部の一部地域では日常生活での会話がシャン語で行なわれることが多いが、タイ語・タイ文字を教授言語とする学校教育の浸透にともなって、シャン文字知識の継承は難しくなっている。そのため、タイ国内で話されることはあっても、読み書きされる機会の少ないシャン語はタイ語の一方言と化しているのが現状である。

しかし、このような状況にも拘らず、シャン文字知識が継承されているジャンルが一つだけある。それは仏教関連の書物である。シャンの人々にとって、シャン文字で書かれた仏教文書の朗読を仏教儀礼で拝聴することは功德を積むことであり、熟練した読み手の「語り」(朗読)を聞くことが楽しみともなっている。近代タイ国家建設による中央集権化にともない、従来地域ごとの多様性を有していたサンガ(僧侶組織)の教育はタイ語化・標準化していったが、サンガ組織の中央集権化の影響を受けない在家知識人の一部が中心となって、タイ国内でもシャン文字知識が継承されている。

タイ国籍を有するシャンとは別に、タイ国北部には、現在でもさまざまな形でシャンの人々がミャンマー連邦シャン州より移住してきている。これらの人々は、生活の必要からタイ語を習得しているものも多いが、基本的にシャン語母語話者・シャン文字使用者であり、これらの移住者向けの書籍・文書市場がタイ国内にも存在しており、ミャンマー連邦やタイ国内で印刷・出版されたシャン文字文書が流通している。これらの印刷出版物で主に使用されるシャン文字は「新シャン文字」と呼ばれ、1950年代に表記法が整備されていない「旧シャン文字」を改良したものである。

比較的古くからタイに居住し安定した社会的基盤を有していながらも、主として口承でシャン語を維持しているタイ国籍者と、社会的に不安定な立場の移民であるシャン文字使用者の非タイ国籍者の間には、文字文化の点で断絶が存在している。タイ国籍者でシャン文字知識を有するものは非常に限られており、数少ない知識人が有している文字知識は「旧シャン文字」で書かれた仏教文書に関する知識が中心となっている。そのため印刷されたシャン語の書籍・新聞・雑誌などを読むものは非常に限られている。一方比較的新来の非タイ国籍者は、その経済的社会的な不安定さから、伝統的な仏教文書を継承する社会的母体とはなりえていない。主として印刷された書籍や新聞・雑誌などの書き手・読み手であり、比較的新しい文字文化のジャンルの担い手となっている。タイ国籍者と対照的な文字文化を有する非タイ国籍のシャン人は「難民・移民」「外国人労働者」「ビルマ国籍離郷民」などとカテゴライズされるが、シャン州とタイ国北部の間のシャンとしての「つながり」は維持されており、ミャンマー側からタイ側へ流入し続ける膨大な人の数はこの「つながり」を背景としている。

本発表では、特に仏教儀礼で使用されるシャン文字文書と、シャン文字文書の作成・流通・使用の使用に重要な役割を果たす在家知識人の活動の把握を通して、人の移動と国家体制の編成によって分断されているように見えるタイ国内のシャン文字文化をつなぐ回路として、仏教文書を使った仏教実践を分析する。

【 タイ北部 シャン、仏教、文字文化 】